

Title	Storia e filosofia del restauro : Restauro dell'architettura in Europa tra il XIX ed il XX secolo(Japanese_日本語)
Author(s)	Niglio, Olimpia
Citation	(2013): 1-38
Issue Date	2013-06-19
URL	http://hdl.handle.net/2433/174346
Right	
Type	Conference Paper
Textversion	publisher

修復の歴史と哲学

19・20 世紀ヨーロッパにおける建築の修復

オリンピア・ニリオ

OLIMPIA NIGLIO

イバゲ大学／京都大学客員教授

序

この講演では、建築の修復の歴史研究における様々な方法論上のアプローチを紹介します。とはいえ、それはけっして網羅的なものではなく、主として、いくつかのテーマと、18 世紀末以後にヨーロッパ大陸における修復の学の発展に、重要な貢献をはたした中心人物たちを紹介しようとするものです。19・20 世紀のヨーロッパにおける修復というテーマの持つ文化的前提を明らかにするため、本題に入る前に、続くいくつかの節では、現存する建築への異なる介入基準と介入方法を、歴史的・文化的に再構築することにしましょう。

歴史的前提と「記憶〔memoria〕」の概念

今日、「修復〔restauro〕」という概念は、文明的価値を持つ物質的証（しるし）を保存するためになされる批判的行為、と理解されています。ただし、そうした定義が学としての裏付けを得るのは、やっと 19 世紀後半のことにすぎません。19 世紀後半になると、受け継がれた文化遺産を分析する際に、それが時の流れのなかでどのような行為を受けたのかについても分析されるようになります。実際、19 世紀の初めまで、ある文化遺産に修復介入が行われる場合、それが美術品であれ建築物であれ、介入を受ける作品とその作品が経た時間のあいだの裂け目が意識されることはありませんでした。すなわち、ある機能と芸術的価値を備えた作品は、永久に今日的であり、それゆえ当初計画されたときとは異なる機能であってもまた、容易くアップデートできると考えられていたのです。とはいえ、それぞれ異なる方法論的アプローチが、一様に過去の美術品や建築物を保存するために注意を払ってきたということは、興味深い事実です。たとえば西洋地中海、とくにイタリアにあって、建物の素材を再利用することは、共和制ローマ時代（紀元前 509-27 年）からごく普及した慣例でした。ローマにある現在のアルジェンティーナ広場の聖域は、その興味深い一例です。アルジェンティーナ広場では、巨大な石版の上に柱の基部が置かれているのです。

まさしくローマ帝国の時代、そうした再利用は実際にいくつも行われており、また、放置された建物の解体もあったことが文学的典拠からわかっています。

このために、とりわけローマの記念物を保護するための法が必要だったのです。というのも、ローマの記念物の多くは破壊され、別の建造物に使う素材として再利用されていたからです。この法は、単体の記念物を保護するためのものではなく、過去の「記憶」を、それもとりわけ帝国の偉大さという「記憶」を保護するためのものでした。「スポイル〔spolio〕」と呼ばれる、このような素材の「不適切な」再利用は、素材や素材の由来を特徴づけている歴史的・芸術的価値の認識よりも、使用価値の方が優位であったことを証明しています。

ケース・スタディ：

- アルジェンティーナ広場、ローマ
- ミネルヴァ神殿、アッシジ
- サン・サルヴァトーレ聖堂、スポレート
- 円形劇場、ルッカ
- 証券取引所、ローマ
- オッターヴィア門、ローマ
- フォロ・ボアリオのフォルトゥナ・ウィリリス神殿とパンテオン、ローマ

この時期に関する文学的貢献にあって、ビザンティンの歴史家カイサレアのプロコピオス〔500 頃-565 頃〕の全六巻からなる著作『建築について〔De aedificiis〕』は興味深いものです。そこでは、ユスティニアヌス帝の治世時代（527-565）に皇帝によって建設され、修復された偉大な建築物が描写され、賞賛されています。

時代を経るにしたがって、古代の復権は、ますます政治的力を含意するようになっていきました。けれども、帝国の復興〔renovatio imperii〕という考えが生まれると、それまで古代の遺物を偶発的に再利用していたのが、古典世界の権威〔autoritas〕について十分に意識されるようになります。帝国の復興は、スポイルという素材の偶発的使用を、優れて精選された要素へと変貌させたのです。

こういったことはすべて、古いものを経済的要素として再利用することも拒みませんでした。壁の骨組み、基礎、柱礎、柱頭、柱身。これらはすべて、宗教建築・一般の建築を問わず、中世の建築において広く再利用されてきました。（芸術性ではなく）有用性によって初めて評価の対象となる、このようなタイプの再利用は、中世を通じて行われました。そして、とりわけ放棄された建物の素材が使用可能であったために、強く奨励されました。中世においては、破壊は古典世界の「統合〔integritas〕」というテーマに送り返されました。つま

り、建築物の断片は、過去の全体性への参照を示しており、古代やローマ帝国にたいするノスタルジックでさえある態度を誘発したのです。そうした審級は、13 世紀から 14 世紀のあいだの、文化的成長の結果として明らかになりました。この時代に、古いものの「記憶」というノスタルジックな観想から、受け継がれたものを未来の世代に伝承することの重要さへと、根本的な変化が生じることになります。

ここで、フランチェスコ・ペトラルカがローマの革命家コーラ・ディ・リエンツォ（ニコラ・ディ・ロレンツォ・ガブリーニ）に宛てた 1347 年の弁論〔Horatoria〕を想起するのは興味深いことでしょう。この書簡でペトラルカは、教皇や権力者たちに対するローマ市民の反乱によって、古代ローマの都市にある古い記念物が破壊されたりしないように、市民たちを仲裁するように、と書き送っているのです。

修復という概念の発展：ルネサンスから対抗宗教改革まで

ルネサンスになり、近代的歴史感覚と考古学研究が発展すると、初めて歴史資料の保存と評価に対する関心が高まりました。こうした傾向は、キリスト教の文化それ自体に起源を持っています。キリスト教文化において保存の概念は、主として、ローマ帝国の凋落以後の古代キリスト教に属するあらゆるものを守ることに結びついていました。しかし、近代的な意味での修復については、啓蒙主義の文化、すなわち 18 世紀末から 19 世紀初めを待たねばなりません。

啓蒙主義以前の時代には、修復とは、作品の価値を認識し、建築とその環境を保存することで人類の文化的・経済的豊かさを保証するための方法であるとは理解されていませんでした。むしろ、保存的介入は、主として建築、あるいは美術作品の単なる再構築や改作のための行為であると見なされていました。

ルネサンス時代、人々は、特にギリシア・ローマ時代の古典性に表象される歴史的時代を取り戻そうとしました。それにひきかえ、中世の記念物は、歴史的・美学的観点から重要視されていなかったために、より自由に「修復」される可能性があったのです。

ケース・スタディ：

- － ブルネッレスキ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラ、フィレンツェ
- － レオン・バッティスタ・アルベルティ、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂のファザード、フィレンツェ
- － サン・フランチェスコ聖堂（マラテスタ寺院）、レオン・バッティスタ・アルベルティによる介入、リミニ

- － ブラマンテの計画に基づく新しいサン・ピエトロ大聖堂のためのプロジェクト、ローマ
- － アンドレア・パッラーディオ、パッラディアーナ聖堂、ヴィンチェンツァ
- － ミケランジェロの計画に基づくサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ聖堂、ローマ

特に建築家レオン・バッティスタ・アルベルティは、自身の計画に「均整〔*concinnitas*〕」という概念を導入しました。この用語は、規則にしたがって様々な要素を調和させる能力のことで、その規則は数学的概念に由来しています。アルベルティは、古い言語をより近代的な言語と和解させることができたわけですが、この能力のために、リミニとフィレンツェの双方でなされた彼の計画について、以後数世紀のあいだ多くの学者が疑念を抱くことになりました。とりわけリミニにおいて、アルベルティは中世の聖堂を「古典的な」新しい構造に組み入れ、凱旋のアーチのモチーフをファザードに、ローマの水道橋のモチーフを側面部に参照したのです。

ルネサンスの建築家たちが過去の記念物に介入するとき、彼らは創造のプロセスに加わるという操作によって、みずからと古代世界の作り手たちとのあいだに理念的な連続性を感じていました。創造プロセスは、けっして完成されたものとは見なされていなかったのです。事実、ルネサンスの建築家たちにとって、仮の保存状態にある作品に介入し、傷んだ、あるいは未完成の部分を作り直すことは、自分の時代の様式にあわせて介入することを、つまり、ルネサンス美術の教えに基づいて介入することを意味していました。

実際、宗教的性格を持つ作品にたいしてきわめて厳格な規則が課され始めるのは、カトリックによって対抗宗教改革が宣言される、トレント公会議（1545-1563）でのことです。その規則は建築にも適用されましたが、目指されたのは形式の偉大さを奨励することでした。多くの祭礼建築が「復興〔*rinnovento*〕」という名の重大な介入を被り、それによってとりわけオリジナルの様式が変質することになりました。

対抗宗教改革期、つまり 16 世紀半ばから 17 世紀にかけて、過去に対して明らかに対照的な様式をほどこすために、すでにある作品にたいして数多くの介入が残されました。

ケース・スタディ：

- － フランチェスコ・ボッロミーニの計画に基づくサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂、ローマ

新古典主義と考古学的興味

18 世紀前半になると、考古学上の重要な発掘・発見を受けて、考古学的文化に結びついた保存科学が現れました。なかでも、南イタリアのナポリ近郊にあるエルコラーノ（1738）、ポンペイ（1748）といった都市の発見を記憶に留めておきましょう。

ウィトルウィウスやルネサンスの書物全体の批評的変遷も重要な影響を与えました。

建築の分野では、合理主義と機能主義の原理によって、美の理想像が変化することになりました。未完成で不調和なものに見える自然を模倣することよりも、古代人と彼らの作品を模倣することが好まれたのです。

ケース・スタディ：

- － ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ、エッチング
- － ジェームズ・スチュアート『アテネの古代遺跡』

一方、考古学への言及に関して言えば、中心人物はドイツ人のヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン〔1717-1768〕です。ヴィンケルマンは、歴史的・批判的記述に基づいてギリシア・ローマの芸術的遺産を有機的に体系化した初の人物でした。教皇ピウス 7 世の自筆文書（1802）や パッカ枢機卿の法令（1820）といった重要な法令もまた、考古学の分野に導入された主要研究から生まれたものです。これらの法令は、古典時代の証言により敬意を払うよう課し、それを取り除くことや破壊することを禁止していました。特にパッカ枢機卿の法令は、美術品や骨董品に関して立法上の意思を示した最初の例であり、それらの対象には詳細な目録化と監視が要求されました。

「修復」の近代的概念

記念物にたいする近代的修復の概念は、1794 年という明確な日付に遡ります。この年、フランスの国民公会によって、フランス革命時に被害を受けた記念物の保存に関する通達が発布されたのです。この瞬間から、受け継がれた遺産を保存する目的で、一連の文化的イニシアチブが計画的に行われ始めました。その多くは、知識人や諸機関によって推進されています。

フランス人たちが活躍したナポレオン支配下の、つまりウィーン会議（1814 年）以前のローマでは、考古学的関心に基づく重要な修復介入の数々が行われました。ラッファエレ・ステルン〔1818-21〕によって実行され、ジュゼッペ・ヴァラディエール〔1822-24〕に引き継がれたティトゥス帝の門は、その重要な修復事例です。ティトゥス帝の門は、自由かつ補完的な操作としての介入が行

われました。ステルンは、すでに 1806 年には、同様の原理に則ってコロッセオにも介入を行っていました。

フランスでは、1841 年 2 月の通達に初めて「歴史的記念物の建築家」が記載されました。この時期に活動した建築家のうち、ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレ＝ル＝デュク〔1814-1879〕は、とりわけ 1845 年から 1870 年にかけてきわめて精力的に活動した修復家でした。ヴィオレ＝ル＝デュクは、十巻にわたる『11 世紀から 16 世紀のフランス建築全事典〔Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle〕』をはじめ、数多くの著作を著しました。その事典の「修復する〔Restaurer〕」という項目で、ヴィオレ＝ル＝デュクは「〔修復するとは〕老朽やその他の事故のために、壊れた部分や不足する部分を、一つのものとして作り直すことである」と述べています。

様式的修復とは、ちょうどヴィオレ＝ル＝デュクが述べたような修復です。すなわちそれは、オリジナルの時代の歴史的・芸術的輪郭において優れて価値を有するあらゆるものを復元することを目的とした、きわめて選択的操作あり、こうした性格を有していないものをその制作物から取り去ってしまうことだったのです。

同時に、こうした修復においては、オリジナルの構造に付属するけれども、もはや存在しない要素を「再構築」する可能性もありました。その要素の形式的同定は、歴史記述による分析や、制作物への直接的な研究によって保証されていた。

ケース・スタディ:

- サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂の修復、ヴェズレー、フランス
- カルカソンヌ城の修復、ピエールフォン、フランス
- トルコ商館の修復、ヴェネツィア、イタリア
- アルフレッド・アンドラージと中世地区、トリノ、イタリア
- ケルン大聖堂の完成、ドイツ
- セント・パンクラス駅、ロンドン、イギリス

ヴィオレ＝ル＝デュクとは異なる立場で、19 世紀から 20 世紀の記念物修復をめぐる議論の発展に重要な役割を果たしたのが、イギリスのジョン・ラスキン〔1819-1900〕です。ラスキンはとりわけ、過去の記念物の保存とは、文明の保存と同義であるとして、記念物の尊重を理論化しました。ラスキンはその目的のために、記念物への介入をその強化に必要な作業だけに制限することを提唱し、その一方で修復は横暴な侵害であり、「破壊よりもなお悪い」と『建築の七燈〔The Seven Lamps of Architecture〕』の格言 31 に記しました。こうして

ラスキンは、修復に対峙する立場を明言したのです。ただし、ここで言う修復とは明らかに様式的修復のことであり、彼はそれを偽造であると分類したのでした。というのも、記念物は、歴史的観点からも美学的観点からも、結果的にはその全体性において破壊されてしまうのであり、修復によって破壊が阻止されることはなく、むしろいくつかのケースにおいては破壊が促進されてしまうからです。ラスキンの立場は、建築家ではないものの、アート・アンド・クラフツ運動の理論家であり、近代的運動の父と見なされるウィリアム・モリス〔1834-1896〕によっても支持されることになるでしょう。モリスは、1877年に古建築保護協会〔Society for Protection of the Ancient Buildings〕を創設しますが、この協会は現在もなお、イギリスの歴史的建造物の保存における重要な参照項になっています。

同じころ、オーストリアではウィーン学派の代表者アロイス・リーグル〔1858-1905〕が記念物の修復と保存の歴史に重要な貢献をなしました。リーグルは、記念物に時間、生成、歴史的史料の概念を結びつけ、記念物の新しい概念を導入したのです。リーグルの修復理論は、「近代の記念物崇拜〔Der moderne Denkmalkultus〕」という興味深い論考に著されています。この論考においてリーグルは、ゴットフリート・ゼンパーの様式の発展についての概念とは反対の立場を表明したのです。リーグルはゼンパーの概念に、芸術意志〔Kunstwollen〕の理論を対峙させました。芸術意志とは、リーグルによれば「あらゆる芸術家が、みずからの作品を、彼自身が行動する社会的・文化的次元に置く能力」というものです。この原理に基づいて、リーグルはオーストリア＝ハンガリー帝国における記念物の保護の問題に取り組みました。実際彼は、芸術と歴史的記念物のための中央委員会〔Zentralkommission für Kunst und historische Denkmale〕の監督でした。1903年の論考「近代の記念物崇拜——その特質と起源〔Der moderne Denkmalkultus. Sein Wesen und seine Entstehung〕」において、リーグルは記念物という概念の変化とその保護に関わる文化の変遷を再構築しました。

リーグルの理論を継承したのは、マックス・ドヴォルジャーク〔1874-1921〕でした。彼は、自律的学としての保存学の基盤を発展させ、主として美術作品の保護活動に関する教授・教育的側面にとくに注目しました。彼の理論は『記念物保護のための基本原理』という書物に説明されています。それは、保存に関する文化の基盤となるテキストであり、オーストリアのみならず、様々な文化的・政治的文脈を関連づけたものでした。ドヴォルジャークの著作は、きわめて新しい展望のもとに、郷土保護〔Heimatschutz〕や工作連盟〔Werkbund〕、近代的都市工学のような20世紀初めの20年のあいだの文化的、芸術的、専門的動向や運動と、保存学の関係性を強調しています。その新たな展望は、イタ

リアにおいては、とりわけサヴェリオ・ムラトーリ、マンフレッド・タフーリ、アルド・ロッシによって、そしてフランスでは、フランソワーズ・ショエによって展開されることになったのです。

イタリアにおける文献学的、あるいは科学的修復

文献学的修復は、カミッロ・ボイト〔1836-1914〕が 19 世紀に著した著作に起源を持ちます。ボイトは、その著作で、文献学的修復の理論と実行に関するガイドラインを概述したのです。

ボイトの理論では、歴史は進化の過程として解釈され、内在的な諸法則によって支配されています。そしてこのために、資料の本質はそれ以外のものから区別することが可能になります。同様にして芸術も、それを生み出す文明と文化的条件の直接的表現として、その時代の技術的、類型的、構築的發展という観点で分析されます。こうして、ボイトの理論では、建築の歴史は類型や構築技術を通じて研究されます。あらゆる介入の前に、歴史的資料や、作品の性格を客観的かつ誠実に決定することのできるすべての方法を用いて、対象を分析的に認識しなければならない、という意見が強固になっていきます。実際、この理論によって、知識と修復のあいだに存在する相互関係への意識が生まれるのです。文献学的、あるいは科学的修復は、科学やテクノロジーの世界との関係に熱狂的に取り組んできました。この文献学的修復によって、「保存的」介入を目的とした科学やテクノロジーの支援は、可能な限り受け入れられ、科学への大いなる信頼が育って行きました。というのも科学は、常に検査・検証の可能な技術によって統制されるからです。ただし、修復介入は、歴史的・芸術的輪郭において際立った部分を保存することを目指しており、それは必然的に選択的行為であることを含意していました。すべては歴史記述による分析に照らされ、際立った性格を持たないものは制作物から除外されることになるのです。

ケース・スタディ:

- カミッロ・ボイトの計画に基づくポルタ・ティチネーゼの修復、ミラノ
- パラッツォ・カヴァッリ・フランケッティの修復、ヴェネツィア
- ルカ・ベルトラミによるサン・マルコの鐘楼の修復、ヴェネツィア

⑫カミッロ・ボイトによる著作ののち、科学的修復の原理を理論化し応用した人物は、疑いなくエンジニアのグスタヴォ・ジョヴァンノーニ〔1873-1947〕でした。彼の原理は、1931 年のアテネ憲章に成文化されています。ジョヴァンノーニは、記念物に明らかな歴史的かつ芸術的価値が認められる場合においてそ

れは修復されるべきであり、欠落部のあらゆる補完は単純で識別可能な方針によって行われねばならないと主張しました。

ケース・スタディ：

- グスタヴォ・ジョヴァンノーニの計画に基づくアウグストゥス凱旋門の修復、リミニ
- グスタヴォ・ジョヴァンノーニの計画に基づくサン・タンドレア聖堂の修復、オルヴィエート
- ジーノ・キエリチのプロジェクトに基づくサンタ・マリア・ドンナレジーナ聖堂の修復
- ジーノ・キエリチのプロジェクトに基づくサン・ガルガーノ修道院の考古学的修復、シエナ近郊

修復の「文学的-批判的」概念

学術界において、ナポリのフェデリコ二世大学教員であったロベルト・パーネ〔1897-1987〕は、異論なく「批判的修復」の概念を 1944 年に初めて提唱した父と見なされています。

パーネに続いて、批判的修復の概念を、建築修復という狭い分野において深め、接合したのがローマ学派のレナート・ボネッリ〔1911-2004〕でした。

「批判的修復は、過去と現在の区分についての十全な歴史意識を持ち、批判のための距離をとることを基礎とする。距離を取ることで、古いものを現実と歴史の次元にもたらし、それを定義することが可能になるのである。」(Renato Bonelli, 1959)

ここから推測されるのは、こうした傾向の主たる目標が、芸術としての作品の認識であり、解放であったということです。つまり、たとえそれによって、資料的価値のある追加や付加部分を破壊することになったとしても、作品の統一的イメージを元に戻し、そうした外見を変質させたあらゆるものから作品を解放することが目指されるのです。したがって批判的修復は、明確な批判的解釈を介して、記念物のうちに豊かな芸術的質を発見し、その形式的水準と、そこに内包される文学的価値をも評価することを目指さなければなりません。こうした文化的文脈にあって「文学的〔letterario〕」という概念は、哲学者ベネデット・クロウチェの叙述とも関連しており、「詩的」と定義されるものとは明確に異なるものでした。

このため、批判的修復とは、批判的判断を行うだけでは認識されえなかった創造的行為を現実化させなければなりませんでした。そのような判断は、芸術

的かつ歴史的価値という概念を定式化するために欠かすことのできない、適切な歴史記述の基準に同意するだけでなく、美術と建築という限定された概念を参照していたのです。

ケース・スタディ：

- サンタ・キアラ聖堂、ナポリ、イタリア

チェーザレ・ブランディの修復理論とヨーロッパにおける反響

チェーザレ・ブランディ〔1906-1988〕は、まさしく「批判的〔critico〕」行為としての修復という概念についての理論を創設した人物であり、彼は 1939 年から 1960 年まで中央修復研究所（現在の保存修復高等研究所）の所長を務めました。ブランディによって、美学と歴史という二重の審級の認識に基づいた、芸術作品の批判的見方が確立されます。そうした考えが目指したのは、再構築のための介入を減らし、代わりに「予防的修復〔restauro preventivo〕」に基づいた保存を評価することでした。「予防的修復」とは、メンテナンス的行為や、破壊を食い止めることのできるあらゆる行為を指しており、したがってひいては、修復それ自体を阻止し、あるいは延期する行為でもあります。建物の環境を保護することを目的としたあらゆる行為もまた、以上のような保存についての概念に含まれていました。ヴェネツィア憲章（1964）においても想定されたように、記念物という概念は検証対象である作品を取り囲む環境にまで拡張されていったのです。しかし、よく観察してみると、ブランディの理論化は、家具などの芸術作品には適しますが、建築作品にはさほど適合しません。というのも建築の場合には、使用価値のように、修復介入後に強い影響を及ぼす複数の局面が、必然的に関わってくるからです。しかしながら、ブランディの諸理論は 1972 年の修復憲章を導くことになりました。それは、イタリアで初めて制定された修復についての憲章であり（1932 年の憲章は記念物のみに捧げられたものでした）、その対象は、文化的価値を持つ様々な制作物へと広げられました。

チェーザレ・ブランディは、ある記念物の歴史的-美学的性格について、その記念物が属する環境との関係性のもとで作品の歴史性に配慮することもまた、本質的であると考えたのでした。

20 世紀後半、ブランディがオリジナルの姿を再構築するタイプの介入に批判を向けているあいだに、ロベルト・パーネは、スイス人のカール・グスタフ・ユングの精神分析や人類学の理論研究に感化され、再構築された多くの作品は「心理学的審級」において価値を有しており、そうであるからには有効なもの

として受け入れられねばならない、と主張しました。こうした立場は、とりわけ東ヨーロッパにおける多くの作品の再構築を容認することになりました。

このような考えは、ヨーロッパ内外を問わず、第二次世界大戦後にも強い文化的抑圧や破壊を被ってきた特殊な社会的・文化的環境に関して、今日もなお有効な裏付けを得ています。

ケース・スタディ:

- ドレスデン市街の再構築、ドイツ
- ワルシャワ市街の再構築、ポーランド
- ジクムント 2 世アウグストの城、ヴィリニウス、リトアニア
- イーペル市街の再構築、ベルギー
- ベルリン王宮の再構築、ベルリン歴史的な中心地区（プロジェクト進行中）

ブランディ以後、とりわけ 70 年代のイタリアではこうした一連の議論が継続され、文化財をめぐる政治の発展について大きな反響をよびました。この歴史的瞬間に抜きん出た活動を繰り広げたのが、美術史家であり、1973 年から 1983 年まで中央修復研究所の所長を務めたジョヴァンニ・ウルバーニ〔1925-1994〕です。特にイタリアにおいて、73 年から 83 年は、重要な時期でした。1974 年、文化財環境財省が発足します（その権限ははじめ教育省に、後に公教育省に委ねられます）。文化財環境財省は、行政の地方分権化の口火を切りましたが、それは普通州の設立、したがって、現在の文化財保護局にあたる地方局の結果として生じたものでした。それはきわめて複合的な諸要素からなる歴史的瞬間でしたが、にもかかわらず遺産の保存とその従事者に関しては、多くの問題がありました。

1973 年にウルバーニが編纂した著作『保存の諸問題〔*Problemi di conservazione*〕』では、修復介入以前に作品に行われるべき予備的研究のためのメソッドを改良し、奨励する必要があることがすでに明言されていました。ウルバーニは、「計画的保存〔*conservazione programmata*〕」の推進者でした。言い換えれば彼は、文化財を、それが有する文脈との緊密な関係のもとに保護できるように、環境レベルでの保護システムの構築を奨励したのです。

イタリアにおける歴史的な中心地区の修復：戦後の経験

再構築の実現というテーマは、主として第二次世界大戦後、「類型的〔tipologico〕」修復のもとに、理論的にも実践的にも重要な反響を生み出しました。類型的修復は、とりわけ 20 世紀後半の、歴史的な中心地区や現存する建築遺産を再生することにたいする関心が成熟してきたことに始まります。類型的修復は、都市と建築の実態の分析的、歴史的、物理的認知調査を基礎としており、時間の経過や様々な使用によって引き起こされる自然的変化に逆らうものです。そのような方法で「類型」の特性を優先し、建築や都市の構造に、永遠で不変の価値を回復させるのです。この修復においては、類型という基礎概念を通して、作品をコンテクストの観点から分析することが基本であり、そして、類型の分析から、修復介入の作業上のガイドラインが導き出されます。こうして、歴史的価値を持つオリジナルの建物の「類型」が、その可能なヴァリエーションともども同定されると、それらが明るみに出され、明晰かつ疑念の余地のない介入によって、正確な保存が進められることになります。そうした方法で、芸術的かつ歴史的価値が認められ、オリジナルの類型をたどることのできるあらゆる建物から、記念物の歴史という目的に照らして重要性を持たない「増築部分」や「追加部分」は削除されました。

ケース・スタディ：

- ピエル・ルイジ・チェルヴェッラーティのプロジェクトに基づくボローニャの歴史的な中心市区の修復
- ピエロ・サンパオレージのプロジェクトによるピサの歴史的な中心地区の修復
- ジャンカルロ・カニッジャによるコモの歴史的な中心地区の修復

補完的保存、あるいは保存的修復

ここまで私たちは、異なる修復方針を分析し、修復という一つの用語が様々な定義を持つことを確認してきました。実際には、すべての方針が、芸術的、文化的、歴史的価値の認められる制作物の保存を目的としており、そのすべての方針において、介入は、対象となる建築の永続性を保証しようとするものでなければなりません。しかし、この永続性は、形式、オリジナルの素描、価値があると思われる部分、などといった様々な異なるものを優先しつつ追求されることになります。

保存的修復は、それらとは異なり、字義通り、保存を要求するような価値がない、あるいは価値が認められない部分こそが優先されるべき要素である、という介入を目指しています。

その主たる目的は、もっとも広い意味での建築に「素材の実質を保存すること」です。

そして他方、補完的修復の「補完的〔integrale〕」という概念は、1975 年の建築的遺産に関するヨーロッパ憲章に由来しています。この憲章において「補完的保存」という語は、「修復の技術と適切な機能の探求が結びついた利用の結果」を意図しているのです。

ケース・スタディ:

- スペインの建築家サルバドル・ペレス・アロヨの修復プロジェクト、カラセード修道院、レオン、スペイン
- ポーランドの建築家ダニエル・リベスキンドのプロジェクト（2001 年開始）、すでにあったものと現代性との対話、ユダヤ博物館、ベルリン
- 建築家ペーター・ツントア（ピーター・ズントー）のプロジェクト（2003-07）、コロンバ美術館、ケルン、ドイツ

文化遺産を保存するための文化的審級と様々な方法論的アプローチの有効利用

文化遺産の保存は、たとえそれが美術・建築・環境の分野での財の保存であれ、あるいはより一般的に、過去に生まれた知のあらゆる形態を保存することであれ、現在では、建設的な目的に向けられています。なぜなら、現在にあって、個人はみな、自分の文化的関心に自由に従い、自身の能力を発揮することができるからです。そのようにして、倫理的価値について認識を深めたり、その結果として生じる時代特有の設計モデルについて深く理解することになるのです。このような理由で、歴史的価値を有する建築財の保存に採用される基準は、社会的問題の性質や当の人間の生態系に関する諸側面に影響を受けているのです。したがって、異なる文脈を持った参照例の基盤を分析することが必要となります。様々な国々において、基準は変化しますし、その基準に基づいて介入戦略が定まると、やがて徐々にそれが固定化していきます。本レクチャーの最後に以上のような考察を加えるのは、複合的なテーマを導入するためです。というのも、今日世界は、ますます経済的価値のグローバル化という原理に向かっていますが、文化財の保存に関しては、それとは逆に、様々なアプローチと評価が提起されているように思われるからです。したがって、この問題に関しては、様々な文化的文脈における複合的な態度や、その動機、追求する目標を知り、比較のために適切な考察をすることが必要なのです。このような考えに基づいて、私は 2006 年から研究活動の一環として、様々な地理上の世界、

とりわけ中・南部アメリカと日本において採用されている、文化財を有効利用するための異なる基準や保存方法を分析しています (Niglio, 2010, 2011, 2012)。

結論

以上のように、建築を保存し、それを未来へ伝えるという分野においては、何世紀にもわって様々な方法論的アプローチが代わる代わる現れました。このレクチャーではそれを紹介することで、大変複合的で刺激に満ちた文化的状況を分析することを目指してきました。それは、ヨーロッパだけではなく、ヨーロッパ外の国々の文化遺産の保護にも関わっています。事実、多岐にわたる文化的環境の下で採用された異なる方法や基準は、多くの側面を明らかにしており、世界の文化遺産を保存するために行われている作業の多様性を評価するために、それを知り、分析することは大変興味深いことです。したがって、調査の行程はきわめて広大ですし、この分野にあっては、学際的な貢献がきわめて重要になってきます。ちょうど 1932 年にノーベル物理学賞を受賞したヴェルナー・ハイゼンベルクがこう述べたように。「人類の思考の歴史にあってもっとも実り豊かな発展は、しばしば、二つの異なる思考の線が交わるところで生じる。これらの線は、人間の文化のまったく異なる部分、異なる時代、異なる文化的環境、あるいは異なる宗教的伝統に起源を持つかもしれない。それゆえ、もしそれらが実際に会えるならば、つまり、現実干渉しあうほど少なくともお互いに関係しあっているならば、人は、そこから新たな興味深い発展が生まれると期待を抱くかもしれない。」

(翻訳／池野絢子)

主要参考文献

- Gustavo Giovannoni, *Il restauro dei monumenti*, Poligrafico dello Stato, Roma 1945
Renato Bonelli, *Architettura e restauro*, Venezia 1959
Bruno Zevi, *Architettura in nuce*, Venezia 1960
Renato Bonelli, voce *Restauro architettonico*, Enciclopedia Universale dell'Arte, XI, Venezia-Roma, 1963
Giancarlo Caniggia, *Lettura di una città: Como*, Roma 1963
Giovanni Carbonara, *La reintegrazione dell'immagine*, Roma 1976
Cesare Brandi, *Teoria del restauro*. Torino 1977
Pier Luigi Cervellati, *La nuova cultura della città*, Milano 1977
Umberto Baldini, *Teoria del restauro e unità di metodologia*, Vol.I, Cardini Firenze 1978
Roberto Di Stefano, *John Ruskin, interprete dell'architettura e del restauro*, Napoli 1983

Paolo Torsello, *Restauro architettonico. Padri, teorie, immagini*, Milano 1984

Roberto Pane (a cura di M. Civita), *Attualità e dialettica del restauro*, Chieti 1987

Vito Fumagalli, *La pietra viva. Città e natura nel Medioevo*, Milano 1988

Paolo Marconi, *Dal piccolo al grande restauro*, Venezia 1988

Paolo Torsello, *La materia del restauro*, Venezia 1988

Amedeo Bellini, *Tecniche della conservazione*, Milano 1989

Marco Dezzi Bardeschi, *Restauro punto e a capo*, Milano 1991

Cesare Brandi (a cura di M. Cordaro), *Il restauro. Teoria e pratica*, Roma 1994

Françoise Choay, *Allegoria del patrimonio*, Roma 1995

Lucilla de Lachenal, *Spolia. Uso e reimpiego dell'antico dal III al XIV secolo*, Milano 1995

Maria Piera Sette, *Profilo storico del restauro*, in G. Carbonara, *Trattato di restauro architettonico*, vol. I, Ed. Utet, Torino, 1996

Jorge Luis Borges, *Storia dell'eternità* ed. italiana, Milano 1997

Giovanni Urbani, *Intorno al restauro* (a cura di Bruno Zanardi), Milano 2000

Jorge Luis Borges, *Finzioni*, ed. italiana, Milano 2003

Giovanni Carbonara, *Avvicinamento al restauro*, Napoli 1997- 2006

Olimpia Niglio, *La conservazione dei beni culturali*, Pisa 2006

Sandro Scarrocchia, *Oltre la storia dell'arte. Alois Riegl, protagonista della cultura viennese*, Milano 2006

Umberto Galimberti, *Paesaggi dell'anima*, Milano 2007

Olimpia Niglio, *Dall'ingegneria empirica verso l'ingegneria della scienza. La perizia di tre Matematici per la cupola di San Pietro (1742)*, Padova 2007

Lorenzo Geri, *Testimoni della rinascita*, Roma 2008

Olimpia Niglio, *La restauracion en la arquitectura. Metodos y tecnicas de analisis*, Ibagué (Colombia) 2009

Sandro Scarrocchia, *Max Dvorak. Conservazione e Moderno in Austria (1905-1921)*, Milano 2009

Olimpia Niglio, Koji Kuwakino, *Giappone. Tutela e conservazione di antiche tradizioni*, Plus University Press, Pisa 2010

Olimpia Niglio, Taisuke Kuroda, *Twelve houses restored in Japan and Italy*, Roma 2011

Ruben Hernandez Molina, Olimpia Niglio, *Experiencias y métodos de restauración en Colombia*, Vol. I°, Roma 2011; Vol. 2°, Roma 2012

Olimpia Niglio, *Le carte per il restauro. Documenti e norme per la conservazione dei beni architettonici*, Roma 2012

Olimpia Niglio, *Cultural Petition in the preservation project*, in *Conservation Turn - Return to Conservation. Tolerance for Change, Limits of Change* a cura di Simone Giometti, Wilfried Lipp, Bogusław Szmygin, Josef Štulc, Polistampa, Firenze 2012, pp. 271-275.

Olimpia Niglio, *Sul concetto di Valore per il patrimonio culturale*, in O. Niglio *Paisaje cultural urbano e identidad territorial*, Atti del 2° Coloquio Red Internacional de pensamiento crítico sobre globalización y patrimonio construido (RIGPAC), Firenze 12-14 luglio 2012, Vol. I, pp. 23-38, Roma 2012.

Mónica Aguilar Bonilla, Olimpia Niglio, *La conservación del patrimonio cultural en Costa Rica*, Roma 2013

Olimpia Niglio, *Concepto de valor para el patrimonio cultural y diferentes métodos de restauración a nivel internacional*, in *Horizontes*, México, n°5, 2013, pp. 3-9.